
アンノウン エンジェル

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン エンジェル

【Nコード】

N4568H

【作者名】

雨月

【あらすじ】

とある日のことである、よくはわからないが学校が自称天使という謎の部隊に占拠されてしまう。それに対して数人の生徒が力を合わせて…………立ち向かうのだろうか？

（前書き）

今回で五十作品目！記念すべき第一作目のメンバーそのまま中身を大幅に変えたやり方でかきましたっ！長かったのか、短かったのか………よくわかりませんが記念すべき（おもしろいか、おもしろくないかは別にして）五十作品目！一人で祝ってパーってやりますかね。

Unknown Angel

僕の名前は天道時時雨。大塚高校二年三組出席番号十八番。まあ、二年生になって一ヶ月程度が過ぎ去ったぐらいなのだが。

高校生だったら甘酸っぱい恋愛のひとつぐらい経験したいものだがどうやら甘酸っぱい恋愛なんてそうそう転がっていないようで女子とあまり話す機会のない僕としては地元の男子たちが地元の女子に話しているところを指をくわえてみている程度だ。

恋人は本です。今は自信を持ってその程度しか言えない自分が悲しい……。まあ、別に彼女ができて同行するというわけでもないんだけどね。

ぐだぐだ日々を過ごすより何かメリハリというか、充実した日々が過ごしたい……。それには彼女が必要だから彼女がほしいと思っっているだけなんだけど、ぶっちゃけいったら別に彼女じゃなくても僕に何かが起こってほしいって思っていたんだよ。

何も世界が変わってほしい、そういったことじゃなくて何か自分の身の回りにちよつとでいいから不思議なことが起こってほしいって思っていた程度なんだ。

だから、よもや僕らの高校に謎の部隊がやってきてそのまま占拠するなんて思っても見なかったんだ。

自称天使の彼らは全生徒の身の安全は保障するが何か要求を突きつけている。僕らは銃を構えた天使たちが見守る中気まずい数学の授業を受けているのだった。

「……え、こ、ここの数式を次にこのように変形してだな、先ほど出したXを入れ込む」

数学の教師は脂汗を流しながらちらりちらりと黒板をはさむようにして立っている二人の天使を見る。天使……本当に天使かはわからないが背中から白い羽を生やしているのだから天使なのだろう。たとえ絵画なんかに出てくるときにまとっている布一枚ではなくまるで特殊部隊みたいな戦闘服に身を包んでゴーグルをつけてフェイスマスクをつけていたとしても、だ。

いるだけで緊張感を出させる一時期はやったマイナスイオンとは反対の効果を発揮する代物であり、先ほどから微動だにしないということによって本当に動くのか？と疑問を持つかもしれないが進入して来るときの鮮やかさは生徒全員がぽかんと見ているしかなかった。

「大変なことになったねえ……」

のんきそうに、だがどこかうれしそうな顔をしている天道時雨の隣の席に座っている霜崎賢治は時雨へとそんな言葉を小声で投げかける。

「しっ！静かにしてないと……さっき騒いだあいつらがどうなったか見てなかったの！？」

先ほど騒いだ男子数名があっさりと撃たれて昏倒。身の安全は保障するとか言いながら躊躇なくその額に銃口を向けたあの二人を見ながら時雨は小声で答えるのだった。

「大丈夫だって、連れて行かれた連中は死んでなかったよ」

「まあ、そうだけだね」

授業を終える鐘が鳴り響いたのだが、緊張はそのまま続いたまま。もしかしたら普段の授業よりも緊張しているのかもしれない。さらに後ろの扉から二人が入ってきて四人による教室監視。どうやら他のクラスもそのような状況のようで普段時雨たちのクラスにや

つてくる生徒が今日は来なかった。

「……トイレに行くときもきつと許可が要るんだろうね？」

「どうだろう？ 賢治が行ってみれば？」

冗談でそういつてみるとわかったといつてそのまま扉から出ようとする。案の定近寄つてきて肩をつかまれるがその天使に向かつて賢治は言つた。

「トイレに行きたい」

「……」

天使が肩から手を離れたところを見るとどうやらいいよう
でそのまま賢治は扉を開けた。

「私も！」

「俺も！」

一人の勇氣ある行動のおかげでそれまでトイレに行きたかつた連
中すべてが手を上げ、少しの間天使は考えるようなしぐさをしてか
らもう一人に手招き。四人いた天使はトイレに連れて行くために二
人いなくなった。十人ほど減つた教室にはいまだに重い沈黙が流れ
ていたのだが、廊下側から何か騒々しい声が聞こえてきた。

「？」

野次馬根性を出した時雨と数人が廊下の窓から顔を出そうとして
入れ替わりになにかボールのようなものが教室へと入ってきて爆発。
「うわっ！？」

熱気を帯びたそれを一瞬だけ爆弾だと思つたが真つ白い煙を出し
て温度が上昇、そしてさらに今度は人型の何かが入つてくると時雨
の手をつかんだ。

「こつち！」

「え？」

別に見知らぬ少女が時雨の手を引いたわけではなく時雨の手を引
いたのは彼の妹である天道時蕾だったのだ。先ほどからメールを送
つていたのだがどうやら会いにきてくれたらしい、非常に危険な方
法で。

手をつかまれた時雨はそのまま廊下を疾駆し、裏庭側の女子トイレに二人で入る。窓付近にロープが縛られておりそこから脱出することが可能であった。

裏庭へ降り立った時雨と蕾の前に先ほどトイレに行ったはずのクラスメートたちが待っていた。彼らの足元には二人の天使が鎖でぐるぐるまきにされており、近くの花壇には頭から土に埋もれている天使が三人ほど見受けられた。

「……一体全体これはどうなってるの？」
事情を知らない時雨はその光景をぼーっと見るしかなかったのだ。
った。

「隊長、数人が反旗を翻した模様です」

「何？われわれ天使に人間がたてつくというのか？」

「そのようです……すでに32、33……他三名と連絡を取れませ
ん」

「ただの人間であるはずだろう？」

「ええ、そのようですが今回の目標がすでに覚醒していたため先導した可能性があります」

「ふうむ、それならば屋上にいる連中をその教室へと向かわせろ」

「はっ！わかりました」

部下に見られないように爪をかむ隊長と呼ばれた天使……

「まったく、何を考えておるのだ……」

それだけつぶやいて彼女は再びモニターを眺め始めたのだった。

「つまりだね、狭いトイレに行った後に個室で一人がうわっ！そんな驚きを見せる。そうしたら何事かと思って天使がやってきて、個室を見たところで押し込み、五人で一氣に個室へとなだれ込んで相手の動きを止めて後はぼこってこのとおりさ」

その説明を聞きながら時雨は首をかしげた。

「いつそんな話をしたのさ？」

「ケータイだよ、ケータイ。屋外に連絡とかは一切取れなかったけど校内なら取れることに気がついて乗ってくれそうな連中にメールしたんだ」

なるほど、この考えに乗った連中は調子に乗りやすい連中と悪そうな連中だった。その人心を掌握して動かしたのだろうと時雨が賢治をまじまじと見る。

「ともかく、裏門は目の前だからすぐに逃げるべきだ」

すでにそんな話をしている最中に残されたのは時雨と賢治、奮だけだった。

「さ、お兄ちゃんわたしたちも行こう？」

「そうだね、とりあえず逃げようか」

残された生徒たちのことも気がかりだったが解放する自信も能力もなかったのであっさりと言葉は悪いが見捨てることにする。

「どうせ身の安全は保障してくれるんだろうから、いこいこ」

賢治がそういつて走り出したのだったがその三人の後ろから声が聞こえてきたのだ。

「それはあくまでおとなしく人質になっけてくれている間だ……あと十時間以内にすべての検査が終わり、全人質を解放する予定だった」銃を突きつけて、いや、すでに発砲して賢治の足元にそれが当たっていた。これまでの天使のような武装をしていたのだが背中から生えている羽が四枚でありフェイスマスクやゴーグルのようなものはつけておらず顔が露出していてショートカットの女性だった。

「……………さあ、おとなしく教室へ戻ってもらおうか？」

「賢治、蕾ここはおとなしく……」

時雨がそういったのだが賢治と蕾は黙って時雨の前に立った。

「お兄ちゃんは逃げて」

「時雨君、ぼくらを見捨てて君は逃げるんだ」

賢治と蕾の姿がぶれたような気がして時雨は目をこする……すると、賢治の右手、蕾の右手にはそれぞれ紫色の剣と青い剣が握られているのだった。

「くそ、やはり混ざっていたのか……」

時雨を完全に蚊帳の外に除外するようなことが起き、さらには躊躇なく相手が発砲してくる。

「いやあ、そんなもの効かないね」

賢治がそういうと、その言葉に従うように向かってきた弾丸はすべて消滅。残ったものは白い煙だった。

まるで変質者のような笑みを浮かべながら賢治は徐々に相手との距離をつめていく。つばみは時雨の前に立って彼を守ることに決めたらしい。

「さあ、命乞いを、もしくは走馬灯でも見る覚悟はできたかな？…

…まあ、どっちにしたって結果は変わらないけどね」

にこつと笑って銃を発砲している相手に近づき、横一線。紫色の軌跡を残しながら相手は悲鳴もなくその場に崩れ落ちたのだった。

「け、賢治!？」

「大丈夫大丈夫、殺したわけじゃないよ」

倒した相手をどこからか取り出した鎖で縛って校舎のほうへと歩いていく。

「さ、行こうか？」

「え？どこに？」

「放送室」

『あ、あ、あゝっ…… テステス、只今マイクのテスト中、只今マイクのテスト中……』

校内にいるすべての者たち、天使と学生たちが首をかしげながらも誰もが様に放送に耳を傾ける。天使たちはこの声は誰だっただろうかという顔をしているし、生徒たちはこれから何が起るのだろうかという顔をしていた。

『校内にいる天使たちに告ぐ。お前たちの隊長は預かった。交渉しだいではショートカットからリーゼントへと髪形が変わると約束しよう…… 余計な抵抗などしないように、後五分以内にすべての天使がこの学校敷地内からの撤退を命ずる、繰り返し……』

一気に校内の天使たちがあわただしく行動を開始し、無線でやり取りをし始める。どうやらこの放送の主は嘘を言っているわけではないようで銃器を構えた天使たちが教室内に一人だけを残して廊下を疾走していくのであった。

「よし、これでOK」

放送室の床に木を突き刺してそこに先ほど捕まえた隊長と思われる天使をくくりつける賢治。

「何してるのさ？」

「この放送室の扉を開けるだろう？開けたらまず、間違いなくこの縛られたおえらいさんの姿を見つけ、敵がいなかどうか確認して突入してくる…… だが、この部屋に入ってきた天使たちすべてはもれなく天界へと強制送還される仕組みさ」

どんなものだい？とそんな顔をしているが蕾はまだ何かをいじつ

ていた。

「蕾、何をしてるの？」

「……いずれわかるよ、見てたらきつとお兄ちゃんも驚くって」
人の悪そうな表情を兄に返し、蕾は立ち上がる。よほど集中していなければ聞こえない足音が聞こえてきて放送室の扉が乱暴に開けられ、隠れていた時雨たちは銃口を見た。どうやら外から確認しているようでそのまま何かが投げられる。

ぱつと光が部屋の中に広がったが時雨たちには効かなかった。

「あれ？まぶしかったのに……」

「まあ、その説明は後でしてあげる」

放送室に侵入してきた天使たちが消えていく……驚きの表情をうかべることもなく、そのまま真剣な瞳をゴーグルから覗かせながら

……

結局、その波が途絶えることなく、放送室へと向かってきた天使たちはすべて消えたのだった。

「むぐつ！むぐぐつ！」

猿轡をされている天使の隊長は何かいいたげな顔をしていたが賢治、蕾はそれに応じることなどなく再び放送器具へと近づいていた。

「ねえ、賢治いいのかな……この人苦しがつてない？」

だからせめて猿轡ははずしてあげようよといおうとしたのだがその間に蕾があきれ返った顔を兄へと向ける。

「あのね、こっちは学校のつとられてるの。この人たちは悪い人でしょ？大体さ、お兄ちゃんも悪い人かわいそうだと思った心の優しい人たちはどうなってるか知ってるの？見事にだまされてみるにたえない終わり方をしてるわよ」

「ま、ともかく蕾君はそのスイッチを入れてくれたまえ」

賢治と蕾がそういつて放送を開始したが、時雨はせめて猿轡だけならいいだろうということとゆっくりと近づいてすりおろしてやる。

「あの、大丈夫ですか？」

「ぜえ……ぜえ……すみません、手間をかけさせてしまつて……」
「どうやら悪い人ではないようだ」と時雨はそう思つて首をかしげる。
「何でこんなことをしたんですか？」

「……はつきり言ひまして、私たちはあなたを探していたのです」

「僕？」

「ええ」

縛られたままで首を縦に動かす。どうやら蕾と賢治は校内の様子がわかるモニターに釘付けになつてゐるようで時雨が話していることには気がついていないのか、それとも話す程度ならどうでもいいのかと考へてゐるのか謎だがそのままにしていた。

「何で？」

「わけを話すととても長いのですが……」

どたどたどたという音が聞こえてきて時雨の左、つまり壁のほうから音がしてきて壁が激しく壊れる……だが、突き破られたはずの壁の破片などはすべて時雨にかかることなく消滅したのだつた。

そして、その後から突撃してきたものたちもすべて消えてしまふ。

「よし、とりあえずここにゐる天使以外の天使はすべていなくなつた」

「お兄ちゃん、そろそろ雑談も終わり。その人から離れて」

蕾に手を引かれて離され、賢治はあの紫色の澄んだ剣を床に突き刺す……すると魔方陣が現れ、召喚されたままに光りだしその光が消えるまでに相手が消えていた。

「一体全体これは……」

首をかしげる時雨に蕾と賢治が寄つてくる。

「あのね、お兄ちゃん……今お兄ちゃんは夢を見ているの」
「夢？」

「そう、そうだよ……君は長い長い夢を見ているんだ。だからね、君がおきたとき、この夢のことは見事に忘れてゐる……だから何も気にすることなんてないんだよ、時雨君」

「おやすみ、お兄ちゃん」

「え？え？え？」

一人混乱している時雨……賢治と蕾は背を向けて放送室を出て行く。彼らが出て行って少し経ち、時雨は言いようもない不安と絶望感に襲われた拳句に体の自由を奪われ、そのまま膝について瞼を閉じたのだった。

く続く……？く

五十作品目記念

時雨

「いやあ、よくよく思えば雨月の小説もこれで五十作品目なのかあ」

輝

「駄作、挫折も多いっすけどね」

零時

「主人公の使い回し……とくに時雨先輩とかめっちゃ出てますよね？」

時雨

「いいのいいの、僕は出るために存在しているようなものだから、以前感想に『時雨君シリーズが読みたい』ってあったりもしたから」

鏡介

「もう一作主人公とかあまりいませんからね……俺とか知っている人いなさそうだし」

零時

「そういえばシグマってやつ以前いませんでした？」

輝

「ああ、あれってシグマ」時雨先輩らしいぜ？もともと天道時時雨って名前じゃなくて天道時シグマ、仇名で頭文字とって『天シ』ってことにしようと思ってたみたいだし」

鏡介

「だから天道時だったのかあ」

時雨

「縁切君たちはどうしたの？」

輝

「ええと、今回は欠席だそうですね？どうせ覚えてくれている人たちいなさそうだしって言ってましたから」

時雨

「なるほど、ぐれたって言うことだね？」

零時

「まあ、そんなところじゃないですか？それで、時雨さんはこの小説どうなさるおつもりなんですかね？続けるんですか？」

時雨

「さあ？それは作者のやる気と根性じゃない？ほら、僕『獄潰し』のほうにも出てるし……」

零時

「あっち完全に行き詰ってますよね？」

輝

「そうだよなあ、困ったもんだねえ」

鏡介

「まあまあ、いずれまた書くんじゃないんですかね？」

時雨

「ともかく、五十作品まで続けられたのはひとえに読者の方々の生暖かい目のおかげだと僕は思うよ、うん」

輝

「確かにそうですね？やる気とか根性ってやっぱり回りに支えられなきゃ出せないって思うし……」

零時

「俺は俺の小説をまたかいてほしいんだけどなあ………続きを」

「五十作品目以降、書けるのか！？乞うご期待？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4568h/>

アンノウン エンジェル

2010年10月8日15時36分発行